

2011年度チャレンジセンター研究報告 2012年度チャレンジセンター研究計画発表

実施報告

日時: 2012年5月28日(月) 12:00 ~ 12:45

場所: 東海大学湘南キャンパス
8号館3階プロジェクト会議室

司会: 崔 一英(チャレンジセンター教授)

- 内容:**
1. 2011年度チャレンジセンター研究報告
2011年度学部等補助金助成研究
「情報端末を活用したプロジェクト型
授業内容並びに評価に関する研究」
岡田工、崔一英、園田由紀子、尾崎由香、堀本麻由子
 2. 2012年度チャレンジセンター研究計画発表
 3. 質疑応答



【第1部】 2011年度チャレンジセンター研究報告

岡田工、崔一英、園田由紀子、尾崎由香、堀本麻由子

第1部では、2011年度チャレンジセンター研究報告として、2011年度学部等補助金の助成を受けて行われた「情報端末を活用したプロジェクト型 授業内容並びに評価に関する研究」について、研究代表者であるチャレンジセンター岡田工准教授から、研究概要、研究経過、研究成果の報告があった。

チャレンジセンター科目では、多くのグループワークや協働作業を通じた体験学習が多く含まれる。それらの成果発表としてグループでのプレゼンテーション(発表)が多く行われるが、グループでの討議や活動をする上では、一般教室(移動机)が効果的である反面、成果発表する上では、パワーポイントなどパソコンを使って作成するほうが、効率的かつ、質の高い発表が可能となっている。しかし、一般教室とパソコン教室を相互に行き来しながら授業を行うことは難しく、また、コンピュータを使う作業の場合、担当となった学生一人が大きな負担を負う場合が多く、チームワークという観点からも問題が見られる。そこで、この研究では、これらのグループワークによる協働作業を維持しながら、効果的な発表準備、発表を行うためのiPadなどの情報端末を用いたプロジェクト型の授業の内容、評価について研究をしている。2011年度、iPadを7台、管理用PCを1台購入し、4~5人のグループで1台iPadを使い、情報検索、プレゼン資料の作成を行った。実施した授業は、岡田先生が担当する挑み力(演習B)、プロジェクト入門A、堀本先生が担当する成し遂げ力(演習A)であった。



授業内、iPadのみでプレゼン資料を作るように指導を行った成し遂げ力（演習A）では、「続きを家でやりたい」という学生に対する対応が難しかったことが報告された。また、別の授業の事例では、パソコン、iPadのどちらかでプレゼン資料の準備をするようにと指示をしたところ、より趣向を凝らしたものを作りたいという学生は、パソコンを使うため、それらの情報をiPad上で用いることが難しかった事例などが報告された。しかし、双方の授業ともに、通常のパソコン教室でのグループ作業とは異なり、グループみんなが覗き込み、協力して作業を行う上で、iPadは有効であったという報告があった。今後の課題としては、無線LANへのアクセスが難しいなど、インフラ面での問題に加え、現在の台数では、2～30人規模の授業にしか対応できず、今後台数を増やしてより大きな演習科目での活用を検討したいと課題も示された。また、iPadで作成したデータの保管や共有において、さらなる検討が必要なことも示唆され、継続的な取り組みとして説明があった。



【第2部】 2012年度チャレンジセンター研究計画発表

第2部では、2012年度チャレンジセンターが独自に取り組む研究計画として、3件の計画が発表されました。これらの計画は、学部等補助金の助成を申請されたもので、今回の発表も採択審査の対象とされるものです。

発表1 「情報端末を活用したプロジェクト型 授業内容並びに評価に関する研究」(継続)

研究者：○岡田工、崔一英、園田由紀子、尾崎由香、堀本麻由子

2011年度に引き続き、iPadを中心とした情報端末を使った授業開発について、新たに、スキャナを用いて紙ベースの教材を混在しながら、iPadを使った取り組みや12-308コンピュータ室に導入されたネットワーク環境下での試み、10台以上のiPadを用いた授業の取り組み、授業支援システムを利用した評価方法の開発などを目的とした研究計画が発表された。

発表2 「「定点観測」手法を使った実践的取材ノウハウ教育の開発」

研究者：岩田伊津樹

ジャーナリズムの現場では、OJT（オン・サ・ジョブ・トレーニング）型の実践教育がおこなわれているが、大学教育として実践することは難しい。そこで、気象観測に用いられる定点観測の方法を取材現場に応用した定点観測取材の手法を用いて、学生の実践的な教育を行うことが有効である。今回の取り組みでは、福島県の



農家に焦点を当て、東日本大震災、原発事故により一変した生活を、その地域に暮らす1農家を中心に継続的に取材をしていく。これにより、本来、新聞社等入社後にしか体験できないOJTを一部教育的に実施することができる。この取り組みに対し、懸念される放射線の問題等は、3月15日の予備取材時に計測した放射線量によると、人体に影響を与えるレベルではなく、学生を連れて、短期間取材活動する上での安全は確保できると説明があった。

発表3 「ルーブリック活用による目標設定・評価に関する研究」

研究者 ○園田由紀子 尾崎由佳

これまでも、チャレンジセンター科目の一部では、ルーブリックを用いた目標設定・学生による自己評価の検討を行ってきた。授業時に用いるルーブリックの適正な段階やルーブリックの記入例からみた履修学生像分析、教育目標としてのルーブリックの効果など、様々な視点で研究が行われてきた。今年度より、複数の教員により、多くの科目でルーブリックを使った事前事後測定が開始され、科目ごとの比較や年度変化等の調査が可能になったことを受け、総合的なルーブリックに関する目標設定・評価についての研究を実施することになった。調査は、授業開始時、終了時に行うルーブリックによる事前・事後評価の結果に加え、履修学生に向けアンケート調査を実施し、その内容から、ルーブリックによる効果・影響を検討する。

質疑応答

Q. 発表1に対し

複数の先生で使われている iPad はどのように管理されているのか。

A. 岡田先生：基本的には、私が設定、充電も含め、管理している。基本的に iPad 同士のデータのやり取りが制限され、使えるアプリにも限りがあるため、一人で一元管理するほうが効率がよいが、負担も大きい。

Q. 発表1に対し

データのやり取りについて、アプリのデータをやり取りするのではなく、Google シートのように、オンライン上に設置されたソフトを使う方法は可能なのか。

A. 岡田先生：そういう方法も検討できる。ただし、まだアプリなどの開発も進んでおり、windows との互換性の高いものも作られる可能性があり、様々な方法を検討しながら、もっとも効率的、効果的な作業ができるものを検討していく予定である。